

第2回「ハートミーティング」 主な発言内容

■ 参加者の主な発言内容について

- 中学校の給食率が上がってきており、必要なところに給食が届いて、うれしく思っている。今後も職員栄養士会等の横のつながりを大切にして、栄養士同士のレベルアップを図っていきたい。
- 保育所では就学前のこどもが1日の大半を過ごすため、そこでの給食とおやつが、こどもの生活の基盤となる。そのため、給食の質が大切であり、保育所では給食のレベルアップを図っている。また、子育て世代の食育を支援するため、調理実習ができる施設等の拡充が重要だと思う。
- 児童福祉センターに勤務しているが、センターを利用するこどもには、手作りの食事を食べたことがない子もいる。センターでは、京のおばんざいなどを提供しているが、一人一人の発達に合わせた給食が大切だと感じている。肥満の子に対する食生活の改善の動機づけなど、対応が難しいケースがあり、さまざまな部署との連携が必要だと感じている。
- 「食育」という言葉は、市民の方にとっても身近になってきたと感じている。平成18年度に「京（みやこ）・食育推進プラン」を策定し、平成19年度には「京（みやこ）・食のフォーラム2007」を開催したところだが、約6000人も参加があり、市民の「食育」に対する関心の高さを改めて実感した。京都市版「京（みやこ）・食事バランスガイド」の発行も好評で、増刷をした。食育は幅が広いので、食育に関するいろいろなイベント等を企画して、周知していきたい。
- 高校生や大学生に対する食育がノーマークになっている。このような若い世代の健康的な食事を推進していきたい。
- 市立病院では、肥満外来の患者に対して、肥満・メタボリックシンドロームの治療として、京野菜をはじめとする京都らしい食材を使ったおばんざいを食べるなど満足感を持たせながらのダイエットを勧めている。病院での栄養指導では、患者も真剣であり、やりがいを感じている。

- 保健所でも、メタボリックシンドロームの予防を図る事業として「ウエストスリムクラブ」を実施しているが、たくさんの方に参加していただいている。その中では、男性のための料理教室やエコクッキング講座を開催してほしいなど、市民の方から様々な要望もある。保健所もしっかり広報をして、市民の方にとって魅力的で もっと利用しやすい場所にしていきたい。
- 本市の保健福祉局保険年金課の特定保健指導に携わる職員数は、政令市でトップである。他都市に比べ、充実した体制で改善率等の目標値を立てて指導に取り組んでいるのだが、他都市から興味を持たれていて、プレッシャーを感じている。もともと京都市民は、メタボリックシンドローム該当者が少ない。それには、京の伝統的な食文化が影響しているものと思われる。この食文化を継承していくことが大切である。
- 今後とも、「京都市職員栄養士会」として、特に、メタボリックシンドローム対策、食文化の継承、エコクッキングなど「もったいない精神」で取り組む環境に対する取組の3点について、総力を挙げて取り組んでいきたい。

■ 市長の主な発言内容について

- 第1回のハートミーティングでは、環境局の第一線で仕事をしている「ごみ収集業務研究グループ」と意見交換し、大変感銘を受けた。今も、毎日、現場を訪問し、自分の目で見て生の声を聞いているが、現場は大きく変わってきていることを実感している。皆、専門性を持って頑張っている。今回も、何十年も研究を続けてきたグループのメンバーの意見を聞かせてもらい、感銘を受けている。
- 私が教育委員会にいたとき、子ども達に命の大切さをどう教えれば良いのか考えた。食育で教えることが一番である。私たちは食べ物から命をいただいている。感謝の気持ち、しつけ、コミュニケーション、教育、環境など様々なキーワードと「食」は結びつく。本市では、地域でつくられた食物を地域で消費するという「地産地消」に加え、その食物の産地を知り、消費のされ方を知るという『知産知消』を推進している。食を切り口にしたら、あらゆる問題の解決の糸口になると思う。そういう意味でも、栄養士の仕事は大変意義のある大きな仕事である。

- 「体育指導員制度」は京都ならではの制度であるが、同じように「食育指導員制度」があっても良いと思う。五感で感じる食育を学校等と連携して推進していく必要がある。

- 小学6年生に百人一首を最も早く覚えさせる方法とはどのようなものか。小学4年生を相手に教えさせるようにすると、6年生は大変よく覚える。これは一つの例えだが、人は誰かの役に立とうとする時に勉強をする。誰かのために貢献しようという気持ちが重要である。メタボリックシンドロームの患者を食育指導員に養成し、誰かを指導する立場になれば、自分自身の病気の改善につながるかもしれない。

- ある会合で、外国人の方に箸の持ち方を褒めたら、怒られた。外国人の方にとっては、きちんと箸を持てることがステータスとなっている。日本の食文化は、外国人の方からも高い評価を受けている。京都の食文化に誇りを持って、今後も頑張ってもらいたい。

以上